

河崎征俊先生のご退職にあたって

加藤 光也

一九七四年から長年にわたって駒澤大学に勤めてこられた河崎征俊先生がこのたび定年で退職されることになりましたが、私が先生と初めてお会いしたのは、たしか、広島大学での日本英文学会大会会場でのことだったと思います。私と入れ替わりに退職された富士川義之先生、それに、高野正夫先生、東雄一郎先生もご一緒だったかと思いますが、穏やかな風貌の中にも器量の大きな大人たいじんといった雰囲気きふうきを漂わせていた様子が、いまでも強く印象に残っています。

その印象どおり、先生の主著である『チョーサーの詩学——中世ヨーロッパの<伝統>とその<創造>』（二〇〇八年）を拝読すると、該博な知識を背景に、決して結論を急がず、悠然と詩のテキストの読解に取り組むといった趣の中に、学問研究の喜びと楽しみとがみごとに体现されています。古びた時代の訓詁の学と思われそうなチョーサー研究の世界に、改めて多様な視点と柔軟な読解を導入できた背景には、折々の話から伺ったところでは、たとえば、碩学であったE・R・クルティウスの広い視野と、鋭敏な批評家ウィリアム・エンブソンの精緻な分析の両方によく通じているという、とても幅の広い学問研究があったように思われます。そのような批評の目は、チョーサー研究とともに、ジョン・ダンから現代のオーデンやディラン・トマスにいたる幅広い詩人たちの世界をさすらう孤独な魂の系譜という視点から論じた『イメージの詩学』（一九八四年）の研究からもうかがうことができますし、ご自身が何冊もの詩集を出している現役の詩人であるということもきっと大きいのだと思われます。

河崎先生はまた、専門分野の学会活動においては日本英文学会評議員や日本中世英語英文学会副会長として活躍されましたが、学内においても、学生の指導に熱心に取り組まれながら、学科主任やコミュニティ・ケアセンター所長、大学院人文科学第二研究科委員長などの重責を担うばかりでなく（私が勤め始めたときには本当に多忙な日々を送られていました）、英米文学科の運営にもつねに行き届いた目を配って、文字通り、英米文学科を支える大きな柱となってられました。

多忙な日々の健康管理には、お好きな朝風呂が一番とのことでしたが、駒澤大学を退職後も健康に留意され、ますますのご健筆を振るわれることをお祈りいたします。

今回のこの『英米文学論集』が、先生のこれまでの研究教育の両面にわたるお仕事への感謝のしるしともなってくれば幸いです。